2025年3月2日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

一生の宿題

［マタイによる福音書18章21～35節］

「そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。

そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

[1]　「主よ われをば とらえたまえ」

　今日、応答讃美でご一緒に歌いたいと思っている讃美歌は、485番の「主よ、我をばとらえたまえ」です。私の愛唱讃美歌の一つで、私の葬儀の時に歌って欲しいと思っている讃美歌の一つです。私が初めに行っていた教会ではよく礼拝の中で歌われていて覚えてしまい、メロディも好きですけれども、この歌詞がとてもいいなぁ、と思っているのです。

　一節 「主よ われをば とらえたまえ　さらばわが霊(たま)は 解き放たれん　わがやいばを くだきたまえ　さらばわが仇に 打ち勝つをえん」。

　意味は「神様、どうぞ私を捕えて下さい。そうすれば、私の魂は解放されます。私の牙を打ち砕いて下さい。そうすれば、私は敵（悪魔）にも勝つことが出来ます」。

　これは、使徒パウロがフィリピの信徒への手紙の3章12節で、「自分はキリスト・イエスに捕えられている」と告白したその言葉を思い起こしながら作られた歌だと言われているようですが、この歌詞は、信仰の逆説を言っているのですね。「私をしっかりと捕らえて下さい。それで初めて私は、私自身をがんじがらめに捕えているものから自由にされるのですから」と。つまり「捕らわれ」が逆転するのですね。私が本当に自由になるためには、私自身がイエス様に捕まえられなければいけないと。でも、これは本当に真理ではないでしょうか。

[2]「憐れんでやるべきではなかったか」

　礼拝ではこのところずっとマタイ福音書に記されている、イエスの譬え話を見ていますが、今日は18章にあります「仲間を赦さない家来のたとえ」です。別名「一万タラントンの負債を赦された男のたとえ」と言っても良い話です。主君のもとで働いていた一人の男が、主君に借金の返済を求められた時、それが一万タラントンという莫大な借金になっていて、主君に泣きつきました。「きっと返済しますから」と。一度はこの男に厳しい言葉を言った主君も、彼のことを憐れに思い（心を深く痛めて）、何とすっかりその借金を帳消しにしてくれたのです！しかし、こともあろうに、この男は、自分にわずかな借金をした者に出会うと、その者に迫って「金を返せ」と言い、「待ってください」と懇願されるとその言葉に耳を貸さず、その者を、返済が済むまで牢の中に閉じ込めてしまったという話です。

　この譬え話を聞いて、私たちはこう思うと思います。「なんて自分をわきまえない、自分勝手な男なのだろう」と。本当にそうです。しかし、ここで描かれているのは、私たちの真相ではないでしょうか。ここで主君は、お前は筋が通っていないぞと怒っています。私に願い、私もあなたを不憫に思って憐れんで負債を無しにしてやったのに、あなたの目から立場が弱い者に出会ったら、あなたはその者を叩く。それは、私の思いというものが全然分かっていないということだと。主君は、「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」(18:33)と言いました。とても強い言葉です。「べきではなかったか」と。私たちはもう頭を垂れるしかないです…。ここでハッとさせられることは、この男の自分本位の罪が良く分かると共に、主君は、この男に牢に入れられてしまった人のこともちゃんと見ておられる、心に留めておられるということです。理不尽な目に遭った人のことも愛している。だからこそ、この主君（神様ご自身と言って良いでしょう）は、この莫大な借金を赦されながら、「ラッキー！」位にしか思っていないこの男を裁かれるのだと思います。そして、私自身はどうなのか。神様に赦されたことを、「ラッキー！」としか思っていないのだったら―結局の所自分可愛さで生きるのであるのなら―あなたにとって福音って何なのか、イエス様は本当にあなたの中に生きているのか、と言われてしまうのではないでしょうか。そしてこれは実は簡単なことではないと思います。聖霊によって造り変えて頂く、私たちの一生の課題・宿題ではないかと思います。

[3] 「七の七十倍までも赦しなさい」。

 今日のこの譬え話は、改めて注意して読むと、イエス様に対するペトロのこんな質問から始まっていることに気付きます。―「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」イエスは言われた。「あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。」なぜペトロはこのようなことを主に聞いたのでしょうか。どこかイエス様に、自分はこんなに「赦し」ということを真剣に考えているということを評価してもらいたかったのでしょうか。ここでペトロが 「七回までですか」と聞いたのは、かなり思い切った言葉であったと思います。「七」は、聖書の世界では、満たされた数（完全数）だと言われます。しかし、主のお答えはペトロの想像を遥かに超えていました。「七の七十倍までも赦しなさい」。どうでしょうか？考えてみると確かに「何回まで赦す」って計算をし始めると、赦したことにならないですよね。そして「赦せた」と思ったなら、自分はまるで神様のような存在になったと思うかも知れない。鼻持ちならない気がします。そうです。「赦し」とは「数」の問題ではないのです。人間にとって「赦し」とは、自分の手中を超えたものなのだよとイエス様はお仰っておられるのではないか、私はそう思いました。

イエス様が、「七の七十倍までも赦しなさい」と言われたこのことですが、私はこれは、言い換えれば、‟捕らわれないで生きるすべ”を教えてくれているようにも思いました。私たちは色んなことにあまりにも捕らわれて生きているということはないでしょうか？それこそ誰かから受けた仕打ちが許せないということや、あの一言を思い出すと今でもとても辛くなる、ということがあるかも知れません。過去の事だと割り切れればどんなに楽かと思いますけれども、人間はなかなかそうなれない。過去が「現在化」してしまうのです。そして、いつしかそれに捕らわれてしまうということがありますね。私たちは弱いのです。そんな私たちにイエス様はおっしゃるのです。そこから解放されて生きなさい、と。「七の七十倍までも赦しなさい」との言葉は、誰に向って言われているのでしょうか。もちろん、この私を苦しめる原因になった「あの人・この人」への赦しということもあると思います。しかしこれは同時に、「自分自身」への赦しをもたらしなさい、という言葉でもあると、私は今回この聖書の箇所を読んで思いました。

誰かのことというよりも、私たちは、結構自分で自分を罰することがあります。真面目に、誠実に生きている人ほどそういうことがあるかもしれません。いや、人間は皆そうかもしれません。自分自身が犯した罪があったとして、それは他人が何と言おうが、それこそ詩編51編の作者が言うように「わたしの罪は常にわたしの目の目に置かれている」のです。時にそれが思いこされ、心が疼くということがあると思います。よく「自分のこの罪は墓場まで抱えて行かなければいけない」などと言ったりしますね。あの言葉も、言い換えれば「こんな自分は楽になってはいけないのだ」と、自分を罰している、裁いていることだと思うのです。私たちは、本当の意味で、自分自身を解放してあげなければいけないと思います。それが、私たちの、真の一生の宿題だと思います。イエス様は私たちに言われます。「七の七十倍までも赦しなさい」。自分自身を赦してあげなさい。自分を裁き主にしなくて良い。あなたを真に裁く方は神様です。イエス様です。そして、その裁きはもう終わったのです！この譬え話に言われているじゃないですか。実はあなたが神に対してどれだけの借金を抱えていたのか。一万タラントン（何千億円と言われる）という、人間には到底返済不可能な負債を、神様は、主イエス様を十字架におかけになることによって、その負債は消えてしまったのだ、あなたは、このあなたに対する神様の完全な赦しを信じて良い。あなたの罪を墓場まで持っていく必要はない。あのイエス様の十字架のもとに降ろして、そして、新しく生きて行けと、私たちの背中を押してくれているのだと思います。そして背中を押すだけじゃない。一緒に歩いていて下さる。何と懐の深い神様でしょうか！

他人を責めることも自分を責めることも、根っこは同じなのだと思います。「何度までですか？」と自分基準で計算をすることから私たちは自由になれる場所があるのです。自分の「正しさ」という定規を外して、神様基準、イエス様基準で生きて行きましょう。最初にお話した新生讃美歌485番の歌詞の通りです。「主よ、われをばとらえたまえ、さらばわが霊（たま）は解き放たれん」。アーメン。お祈り致しましょう。

神様、あなたの大きな赦しを感謝致します。私たちに対する深い憐みは、ハッキリと十字架に見えてきます。どうか、そこから、「自分自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」と言われるあなたが示す生き方へと私たちを送り出して下さい。これから与る「主の晩餐」を通しても、私たちに対するあなたの確かなご愛を、もう一度受け止めさせて下さいますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。